竜中だより

校訓　自律　協力　創造　勤勉

NO.　１６

令和５年２月９日発行

学校ホームページ　http://ryuyo-j.city-iwata.ed.jp/

学校診断評価について

令和４年度学校診断調査にご協力いただき、ありがとうございました。２学期末に行った結果につきまして、本紙面にて報告させていただきます。
※４「かなり当てはまる」３「まあ当てはまる」２「あまり当てはまらない」１「ほとんど当てはまらない」のうち、４「かなり当てはまる」と３「まあ当てはまる」の回答の和を肯定的回答群とし、その数値を下記に示します。　　（　）は昨年度との比較。

【生徒アンケート項目】	【肯定的な回答（%）】
1　学校生活が楽しい	９２（＋2）
2　授業の内容がよくわかる	８８（＋4）
3　進んで先生に聞いたり、自分で調べたりして学習している	７４（＋2）
4　生徒会や学級の係活動、部活動に積極的に取り組んでいる	９０（±0）
5　学校に相談できる先生や友達がいる	８９（＋1）
6　あなたの学級は、ルールを守り、互いに協力する雰囲気がある	９１（＋1）
7　先生方は、あなたのことを理解してくれている	９１（＋1）
8　友達や先生、地域の人に進んであいさつをしている	９４（－2）
9　たよりなどを必ず保護者に渡している	８５（＋5）
10　行事や日常生活を通して、自己有用感を高めることができた	８８（＋2）
11　あなたの英会話の力は伸びている	７９（＋8）
12　ｺﾝﾋﾟｭｰﾀなどを使って、自分の考えをまとめたり、わかりやすく相手に伝えたりできる	８２（－5）
13　今住んでいる地域の歴史や自然に関心がある	６０（－3）
14　あなたは志（夢や希望）をもっている	８０（＋4）
15　学校や地域のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動などに気持ちよく取り組んでいる	６５（－6）
16　授業で学んだことを、他の教科の学習や生活に生かしている	８１（－7）
17　大交流会などを通して、学府の小学生とかかわることのよさを感じることができた	９３（＋3）

【保護者アンケート項目】	【肯定的な回答（%）】
1　お子さんは、学校生活を楽しんでいる	９２（＋2）
2　お子さんは、学校での学習内容を理解している	７２（－1）
3　お子さんは、自分で調べるなど主体的に学習いている	７３（＋8）
4　お子さんは、生徒会や学級の係活動、部活動にしっかり取り組んでいる	９２（＋3）
5　学校に相談事や悩み事に適切に応じてくれる人がいる	８３（＋1）
6　お子さんの学級は、互いにルールを守り協力する雰囲気がある	９３（＋7）
7　先生は、お子さんのことを理解して指導にあたっている	９２（±0）
8　お子さんは、友達や先生、地域の人に進んであいさつをしている	８４（－2）
9　たよりなどを通して、学校・学級での活動内容がよくわかっている	９２（＋4）
10　学校は、地域・保護者との連携ができている	８７（－1）
11　学府や学校が目指す教育内容を知っている	７５（－3）

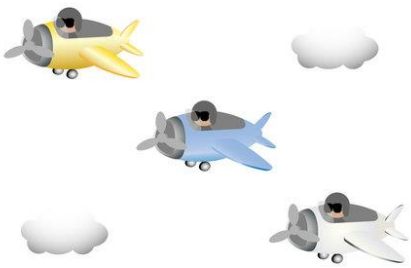
今年度もコロナの影響があり、まだまだ制限のある中での学校生活となりましたが、生徒が本当によく頑張っている姿をたくさん見ることができました。アンケートでも生徒、保護者ともに、全体的に肯定的な回答が多く、嬉しく思いました。

今後も学校や学府で目指そうとしている子どもの姿や教育内容、子どもたちの活躍の様子について、保護者の皆様とも共有しながらよりよい竜洋中を目指して取り組んで参りたいと思います。これからも温かいご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

校長先生のお話（2/8　会礼）

今日は、竜洋と飛行機にまつわる三つのお話をします。

一つ目は「福長（ふくなが）飛行機製作所」と「天竜号」のお話です。明治 26 年（1893 年）に今の浜松市南区飯田町で生まれた福長浅雄さんという方がいらっしゃいました。明治 43 年（1910 年）福長さんは、18 歳の時に徳川好敏（よしとし）という人が日本で初めて飛行に成功したニュースにふれ、飛行機をつくりたいという夢をもったそうです。ちなみにライト兄弟が世界で初めて有人飛行に成功したのは 1903 年ですから、福長さんが 10 歳の時ということになります。その後、埼玉や大阪、千葉で飛行機について学びました。そして大正７年（1918 年）、25 歳の時に天竜川の近くで、天竜３号という飛行機で初めて空を飛ぶことに成功しました。大正８年（1919 年）には掛塚に「福長飛行機製作所」を設立し、飛行機の製作や飛行士の養成を始めました。大正 11 年（1922 年）には国産初の旅客機として６人乗りの「天竜 10 号」を開発しました。残念ながら、当時は旅客運送事業についての法律が整備されておらず、実際にお客さんを乗せての営業はできなかったそうです。しかし、福長さんが夢を追い続けて、民間の力で国産初の旅客機を完成させたその情熱には深い感銘を受けますね。



二つ目は「天竜飛行場」のお話です。天竜飛行場は、正式な名前を「明野（あけの）陸軍飛行学校天竜分教所」と言います。飛平松の「袖浦公園」に飛行場跡が残っていますので皆さんもよく知っていると思います。袖浦公園のコンクリートの遺構は戦闘機の格納庫として使われた施設の跡だそうです。旧日本軍が戦争のために戦闘機の研究とパイロットの養成をしようとしていたのです。天竜飛行場は昭和 15 年（1940 年）から建設が始められました。昭和 17 年（1942 年）には２本の滑走路や飛行場としての施設が完成しました。この頃は太平洋戦争が行われていて、この飛行場で訓練を受けた多くの若者が戦地へと赴いていったとのことです。戦争が激しくなった昭和 20 年（1945 年）には飛行場は使われなくなり、終戦後には天竜飛行場は取り壊されました。

最後は「緑十字機」のお話です。これも太平洋戦争にまつわるお話です。昭和 20 年（1945 年）８月 15 日、日本が降伏することを天皇陛下がラジオで放送し戦争が終わりました。「玉音放送」と言われています。しかし、正式な終戦ためには降伏文書の調印が必要でした。お互いの国の代表がサインした書類の交換が必要だったのです。そのためには、まず日本の代表者がフィリピンの連合国最高司令部に出向く必要がありました。そのための飛行機が緑十字機です。今まで戦争に使っていた飛行機の機体を白く塗り、緑色の十字を描くことで、戦争用ではないということを示した飛行機です。しかし機体には戦争による傷みもあり、万全の状態ではありませんでした。日本の代表はこの緑十字機で千葉県から沖縄まで飛び、その後アメリカ軍の飛行機でフィリピンに行って降伏文書の書類を受け取りました。この文書は急いで東京に届ける必要がありました。日本の代表は書類を持って再び沖縄に戻り、緑十字機に乗り換え東京に向かいました。ところが、東京に向かう途中、遠州灘沖で燃料がなくなり、真夜中に竜洋の少し東の鮫島海岸に不時着してしまいました。このとき、不時着に気付いた鮫島の人たちが代表の人たちを助け、なんとか連絡をとって袖浦の天竜飛行場からトラックを手配しました。代表の人たちはそのトラックで浜松飛行場、今の航空自衛隊浜松基地に向かうことができました。この時、天竜飛行場には飛行機がなく、浜松飛行場にも修理が必要な飛行機が一機だけだったそうです。そのたった一機の飛行機を急いで修理し、東京に向かうことができました。こうして降伏文書は無事に東京に届けられ、９月２日に休戦協定の調印が行われて正式に戦争が終結したのです。

今日は竜洋と飛行機にまつわる三つのお話をしました。一人の若者の夢やロマンがつまった「福長飛行機製作所」と「天竜号」の話。太平洋戦争中に多くの若者が戦地に向かうこととなった「天竜飛行場」の話。鮫島の人たちの迅速な救援が「日本の命運を左右した」とも言われる「緑十字機」の話。色々な歴史を知ることで、皆さんがこれからどう生きるか、これからの世の中をどうつくっていくかを考えるヒントや皆さんの志につながればと思います。